


上今井遊水地整備事業に伴う発掘調査

みなみ おお はら

南大原遺跡 現地説明会 資料

令和6(2024)年8月10日(土)
(一財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター



南大原遺跡遠景(令和5年11月 南から)  : 今回ご覧いただく調査区

《遺跡の概要》

南大原遺跡は、曲流する旧千曲川左岸の発達した自然堤防及び後背湿地上に立地します(千曲川は明治3~5(1870~1872)年に瀬替えされ、現在の位置に流れを変えています)。昭和25(1950)年の神田五六氏らにより、縄文時代前期後半の竪穴住居跡の一部が発掘調査されました。出土した土器は後に「南大原式土器」として位置付けられました。その後、県道三水中野線の改良工事に伴って、旧豊田村教育委員会や当センターが発掘調査し、弥生時代中期後半を主とする遺跡であることも明らかになりました。

上今井遊水地整備事業に伴い、当センターが令和5(2023)年度から発掘調査を実施し、古地図に記載されていた近世の水田跡や奈良時代の掘立柱建物跡などの遺構を確認しました。本年度の調査では、弥生時代の竪穴建物跡のほか、これまで空白の時代だった平安時代に属する竪穴建物跡が見つかり、これで、縄文時代から近世に至るまで、人々の生活の痕跡が南大原遺跡一帯に記されていたことが明らかとなりました。

《発見された遺構群》

昨年度の調査で古代の竪穴建物跡が重複して存在することが確認されていたトレンチの場所を中心に、33×34mの調査区を設定し、調査を進めたところ、弥生時代中期後半(約2,000年前)と平安時代(約1,100~1,200年前)の遺構群がみつかりました。

現在までに把握した時代別の遺構は以下のとおりです。

弥生時代中期後半：竪穴建物跡4軒、溝跡2条、墓穴と考えられる土坑2基

平安時代：竪穴建物跡10軒、溝跡1条

時代未特定：墓穴や柱穴と考えられる土坑158基

今後の調査で、時代を特定しながら、各時代の集落景観を明らかにしていきたいと考えています。

《弥生時代中期後半の南大原遺跡》

これまでの南大原遺跡の発掘調査は、県道三水中野線の改良工事に伴うものが中心で、上今井橋のたもと(中野市街地側)に調査区が集中していました。そこでの調査成果は、弥生時代中期後半を中心とした集落跡の様相を物語っています。

今回の調査区は、県道三水中野線から約700m離れた千曲川の下流に位置し、ここでも弥生時代中期後半の竪穴建物跡が複数確認されました。竪穴建物跡(SB110)からは、石器や石製装飾品を作る際に生じた微小な石片が多数出土しており、道具の製作工房があったことが想定されます。県道三水中野線周辺のムラと一続きのムラになるか、あるいは独立したムラとなるか。来年度以降の調査に乞うご期待です。

《平安時代の南大原遺跡》

まだ、調査が完了した竪穴建物跡が無いので、様々な特徴を明らかにすることはできませんが、今回の調査で見つかった平安時代の竪穴建物跡のカマドの位置は皆、端に寄るといった特徴がみられます。古墳時代以来、カマドが壁の中央部に設えられるようになり、時代が下るにつれて壁の端の方へとカマドの位置が移っていきます。屋内の空間を有効に使うための工夫とみられます。

今回の調査区で見つかった竪穴建物跡の時期は、出土した土器の特徴から、9世紀代と10世紀代に大きく分けられます(展示場でお見せするSB102から出土した土器は、9世紀代に属します)。ここで注目されるのは、10世紀代の集落がこの地で見つかったことです。北信濃ではこれまで10世紀代の集落跡は見つかっておらず、南大原遺跡が初めてであり、信濃国最北の地となります。

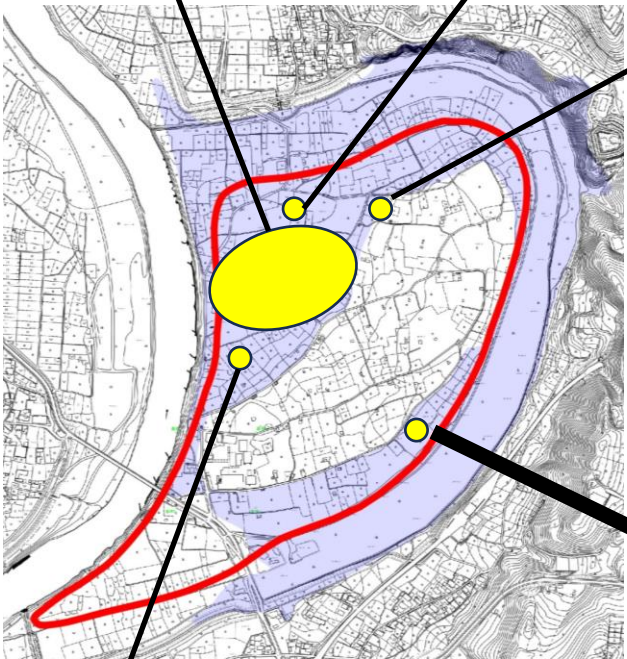
今後、調査を進めて、9・10世紀代の集落の様相を明らかにしていきたいと考えています。



江戸時代の水田跡を検出

古代の土器が焼土等とともに多数出土

平安時代の竪穴建物跡を4軒検出



碗出土状況



耳皿出土状況

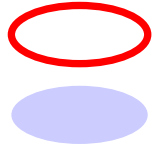


SB103掘下げ作業



砥石出土状況

奈良時代の掘立柱建物跡を1棟検出



南大原遺跡の範囲

上今井遊水地整備事業の範囲



石器や装飾品を製作する際に生じた多数の微小な剥片や母材となる石（石核）が出土したため、50cm四方の区画を設定し、土を採取しながら、掘下げを進めています。



丹念に土を平らに削り、土の違いを見極めながら、竪穴建物跡の形を探りました。